中学生広島平和教育研修

参加者5名が研修で感じた思いや決意を紹介します。

富士見中学校２年
越川（こしかわ） えり

「生きている」

私は八月五日から八月七日まで広島研修に行かせていただき、広島市で平和について学んで参りました。

広島市はとても暑く、せみがたくさん鳴き、青空が広がっていました。こんな中、朝八時十五分に原子爆弾が落ちるとは考えづらく、想像があまりできませんでした。きっと、七十三年前の八月六日の広島の人々も爆弾が落ちるなんて思いもしなかったと思います。いつも通り日常が始まろうとしていたけれど、八時十五分に光が出て、青空がみるみるうちに真っ黒になってしまい、人々がたくさん亡くなり、傷ついてしまいました。八月六日に私たちは平和祈念式典に参列し、八時十五分に黙とうをし、平和宣言、平和への誓いを聞きました。平和への誓いで、二人の小学六年生が「平和とは人も自分も幸せであること」と言っていました。一人ではなくみんなが幸せであり、それは、明日があるのかと不安になる人がいない事だと思いました。式典にはたくさんの人々が参列していて、最後に思いを込め、原爆死没者慰霊碑の前に献花していました。中には涙を流して手を合わせる人もいました。私は、ここで大切な人といられる幸せさを学びました。家族や友達と一緒に笑ったり泣いたりできることがどれだけ幸せかを学び、一緒にいられるその一秒を大切にしなければいけないと思いました。原爆で、たくさんの誰かにとって大切な人が亡くなりました。話せる、一緒にいられるこの一秒を大切に、これから生きていきたいと強く思います。また、八・六証言の集いで被爆者の方に実際に話を聞きました。私が話を聞いた方はお父さんが軍人で、お父さんを亡くし、原爆が落ちたときはお兄さんと泣きさけびながら逃げ、爆風で転び、とにかくこわくて悲しかったと言っていました。そして、原爆や戦争は、人、動物、植物、みんな生きたかったけれど亡くなってしまい、この事実をきちんと見て聞いて、受けとめてほしい、と言っていました。その方は、悲しみもあるけれど、今は平和を伝えるために活動していて、一度しかない人生をもっと楽しみたい、と思っているそうです。その方の話を聞いて、戦争で人の悲しみをつくってはいけないと思いました。そして、その方は大切な人を失っても、生きる事を大事に今も私たちに戦争の恐しさや思いを伝えているので、私もこの一生を大事に、学んだ戦争の恐しさ、人々の悲しみ、思いを伝えていきたいです。

富士見中学校２年
吉川（よしかわ） 大介（だいすけ）

「ヒロシマについて学んだ夏」

一九四五年（昭和二十年）八月六日の原爆投下より七十三年が経った今僕は「ヒロシマ」について知るため、広島へ派遣して頂きました。現地でしか分からない雰囲気などを沢山感じることが出来ました。

八月五日の夜、初めて原爆ドームを生で見ました。自分の目で見ることで「本当に原爆が落とされ、本当に恐しいな」と思いました。平和記念公園内では亡くなられた方がこの下にいっぱい居られると思うと、すごく気の重みを感じました。本当に自分はこの上に立っていていいのかを考えさせられました。

八月六日平和祈念式典に参列しました。沢山の人が参列した中、その中でも外国の方が目立ちました。外国からも沢山の方が来て「ヒロシマ」について知ろうとする姿が印象に残りました。被爆者の方の証言では苦しかった様子を生で聞けて、具体的な事について知ることができました。

八月七日被爆した袋町小学校に行きました。自分の状況を知らせたり、大切な人を探したりするための伝言が壁にあり、すごく胸が苦しくなりました。被爆して苦しい状況の中、大切な人を探すために広島を歩き回っていたことを考えるだけで胸が痛いです。熱線で溶けた物等を見て、原爆の恐しさを実感しました。

この三日間で「ヒロシマ」について沢山の事を感じ、沢山の事を学ぶことができました。今回の広島研修を通して命の尊さ、広島の方々のたくましさを学びました。とても大変で苦しかった状況の中からここまで復興してきたことが本当にすごいと思いました。また原爆資料館に小さい子供が沢山いたことが胸に残りました。教えても分からない位小さい子供に「ヒロシマ」を教えようとする親の姿を見ました。その姿を見て、親せきや友達、家族など自分の近くの人達に「ヒロシマ」を伝えることが平和への一歩だと改めて感じました。広島の方々の強さを自分の人生に活かすと共に、平和な世界にするために自分ができる「伝える」ということをコツコツとしていけるようにします。